

水やり

加藤文子

日も長くなり、春の気配の漂うこのごろ、チュンチュン小鳥のさえずる中で水やりをする。

ゆっくりジョーロでできるのも、あとわずか。植物たちが本格的に活動をはじめたらこんなふうにはいかない。ジョーロでは間に合わなくなって、ホースも使うようになるだろう。

今日は気温も上昇。少し風も吹いて、空気も乾燥しているので殊更よく乾く。

くもってどんよりした空もようの日は続いたので、たくさん水やりするのは久々だ。

乾きはじめて鉢を捜して水がめと盆栽棚を何度も往復する。しだいにジョーロを抱える右手に疲れを覚え、掬い上げる水の重さも意識するようになる。体が鈍ってしまったのだろうか。

毎日毎日してきた水やりなのだが、どういうわけか今日は疲れたと思った。

ジョーロの中でタプタプ踊る水音を聞きながら盆栽棚をめぐると思ったら、ふいに子供の頃の父の営む盆栽園の水やり風景が脳裏に浮かんだ。



家業が盆栽園だったので庭に設えた棚にはたくさん盆栽が並んでいた。敷地も、盆栽の量も、大きさも私のとはくらべものにならない。

当時はホースで水やりするという手段もなかったので、庭のあちこちにコンクリート製の大きな水槽や水がめがいくつも置いてあった。

頻繁に乾く初夏から夏のあいだは、父や弟子たちは麦わら帽子にランニング姿で首から下げた手ぬぐいで汗をふきふき、ひたすら水をやっていった。

炎天下、なん杯もなん杯もジョーロで水を汲んでいた。

体を休めなければ続かないほど、消耗していたのだろう。昼の水やりを終えると仕事場の板の間でみんな横になっていた。

今ではジョーロで間に合わなければホースを使うこともできる。どちらも選べるのはありがたいことだと改めて思った。

水やりする父の姿や、敷地いっぱいひろがる盆栽の庭の様子が思い出されて、「水やりくらいでヘコタレルナヨ」と、喝を入れられたような気がするのだった。

